

くろっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可  
平成二十一年二月一日発行(毎月一回一日発行)  
第十五卷第十二号(通巻第一八十号)

鈴



くろっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第180号

4. 2009

# 花

品川 鈴子

忌の句碑に「誓子の宇宙」  
凭<sup>もた</sup>せかけ

学ヶ丘和タンポポかとしやがみ込む

ひた歩く只紅白の梅めざし

蝶となる富老マンション歩み出て



富老館窓に鉄拐山笑ふ  
吟遊す彼岸団子も作らずに  
石に坐し花詠む独りに如くは無し  
死に順の列に割り込む花堤  
花訪はむ妣ははの育ちし邸あと  
衆溢る黙つて城の花咲けば



# 第十三回ぐるっけ賞発表

受賞作品

俳句の部

「山行」

國永靖子

岩棚に風の届きて母子草  
男体山凝りて竜頭の滝となる  
夏未明古希のとりつく槍穂先  
猪独活の花野に小屋の道しるべ  
川霧の上に焼岳旅果つる  
鹿肉を焙る猟師の手の厚く  
薄氷を踏み金剛へ九十九折

俳句の部

候補秀作 第一席

「絵具の匂ひ」

静寿美子

娘似の手作り雛や愚痴ひとつ  
新調の藍の夏服髪を切る  
いさかひの真中に花火揚がりけり  
すれ違ふ絵具の匂ひ秋暑し  
ななかまど宿木にして古代杉  
左手の指輪の跡の寒々し  
重きもの内に抱へて雪積る

連句の部 受賞作品該当なし

候補秀作 第一席

歌仙「迎太鼓」の巻 三吟

連衆

森田 蓉子 静 寿美子 小原みどり

俳句の部

候補秀作

第二席

「自己形成」

大松美津子

うかぬ顔一つまじりて花筵

古書店で下巻探して春隣

膝頭締め初釜の客となり

第三席

「道化師」

三浦ひろみ

初場所の馴染なき顔出世鬘

野蝦治屋に鋏鎌並ぶ春祭

道化師の白き長脛磯遊び

第四席

「沙羅の花」

松木 清川

豪雨去り倒れし向日葵介錯す

秋の堂 勧進帳を独吟す

朱の橋を通る人なく小雪舞ふ

第二次選考通過

伊勢ただし 中山勢都子

岩崎可代子

第一次選考通過

澤浦 緑

河村 武信

木津左耶子

# 玉

# 鈴

# 吟

兵庫 川合まさお

迎春へ鈴の緒変へし火伏せ神  
葉牡丹の牛の兒撫づ花時計  
消し合つて又作り合ふ鴨の水尾  
着ぶくれてポールマシンの見る子かな  
植樹者の名札のゆるる帰り花

大阪 河村 泰子

買初めは本と定めて「歎異抄」  
紙独樂の回ればサイケ調になり  
燈を飾る木の家守りゐて  
左義長の灰洛外へふうはりと  
べこの子の斑衣に初明り

東京 北川とも子

初夢の中に出口をさがしをり  
のびやかなチェロの余韻や春近し  
亡き人の近くにをりぬ冬桜  
底冷えの螺旋階段はてしなし  
冬薔薇の刺うす紅に荒々し

東京 北畠 明子

大旦きのふと同じ眼鏡かけ  
新暦金婚の日へハート貼る  
門前に焚火の匂ひ蕎麦処  
先生へ鈴一つ買ふ初詣  
雪踏んで男の墓を尋ねけり

兵庫 木原 今女

書初に指の震への治まらず  
日本海覆ひ隠して雪の降る  
雪深し兄に背負はれ登校す  
寒の水五臓六腑を目覚めさす  
残業子待つ母は背に真綿負ひ

兵庫 木村 美猫

独吟の茂山千作淑氣満つ  
買初のアルプスの水ほの甘し  
思惟の果て遂に白鳥高舞へる  
六つの花仏花ふうはり仏抱く  
ビルを抜け光る海へと初電車

愛媛 久保田由布

短日の座敷童子<sup>わらし</sup>がもの隠す  
雪の日に限つて峽に救急車  
保育所の聖樹下枝にばかり雪  
日向ぼこうとうと命なしくづし  
日脚伸ぶ庄屋座敷の座敷牢

兵庫 藏本博美

もの言はぬ男相席新年会  
車椅子ギリリと廻し初詣  
悔ゆるべきことの幾つか初詣  
白梅にさきがけ開く梅の紅  
香の失せて壺に溢れし水仙花

兵庫 栗田武三

けふだけはわが宿に啼け初鴉  
髪結の寝正月てふさもあらん  
客なきに座敷飾りて年迎ふ  
当人は謡のつもり三日の湯  
老妻と兎らの合唱三日の湯

兵庫 小阪律子

採掘の鑿跡寒し蠟明かり  
寒鯉の家老屋敷が町役場  
新参の夫婦漁師が竹登上ぐ  
悴みし手に穴釣りの当たり来る  
海鼠料るダイヤル式の黒電話

東京 後藤とみ子

融雪剤撒かれてをりぬ五番街  
別行動ばつたり出会ふオイスターバー  
着ぶくれてニューヨーク子の立ち話  
幼きよりあの木の上に寒オリオン  
紅き実<sup>み</sup>に雪あはあはと留まりぬ

大阪 小林玲子

遊女屋の手摺れし引戸虎落笛  
葎<sup>ら</sup>を選る琴弾くさまに胼の指  
足早に付けず嵯峨野の葱畑  
実千両揺れて隠れる庭佛  
冬の日を喪には触れずに過しけり

香川 今藤倫子

餅の花姉妹どちらもはにかみ屋  
松飾る駅に喪服を憚りぬ  
星冴ゆる喪服の馴染む孫となり  
冴ゆる夜や知らぬ従兄と会ふ忌日  
遅れ来て悴かむ手より献花せし

兵庫 坂口三保子

通し矢の矢場を濡して寒の雨  
吉兆を値切る人あり初戎  
大熊手売れ響きけり鉦・太鼓  
びりびりと玻璃戸振はず寒稽古  
チャイルドシートに毛ぐるみの赤児のせ



# 菓草歳時記

(二七九) ユスラウメ(英桃 山桜桃)

須賀悦子

飛鳥風ゆすらの花の岡べかな

松瀬 青々

近江高島駅から安曇川町西万木に向かう街道筋に「吾兵衛」という季節料理屋さんがある。この店の女将さんは美人で働き者、めつぼう気風がいい。今は、長男夫婦が跡を継ぎ、次男が近くに支店を構えてよく流行っているが、この一代目の主人と、女将さんが春の声を聞くや、店の周りにある山菜を摘み、琵琶湖で捕れた五センチ位の稚鮎を天ぷらにしたり、釜揚げ、柳川にして季節感いっぱい料理を食べさせてくれる。

庭に大きなユスラウメの木があり、四月その花の満開の頃、女将さんに花枝を切って頂いた。「この実が美味しいんだよ」と聞いていたが、鮎も解禁になった六月はじめ、真っ赤なユスラウメの実をざるにいれて食事の後に出して頂いた。サクランボに似て甘酸っぱくて美味しい。その実をいわれた通り、氷砂糖とホワイトリカーに漬けてみたところ

三ヶ月も経つとききれいなピンクの英桃酒ができ、このお酒の中の実をつぶして種を取り、ジャムにしたが、これが又、美味しかった。

この頃は、これが薬用とは思わなかったが、牧野博士の和漢菓草大図鑑によると、果実(山桜桃)、種子(郁李仁)が薬用として、薬効は、山桜桃に気を益し精を固める効能があるとか、下痢、遺精の治療に用いられる。郁李仁には全身の水分を通利する作用があり緩下、利尿薬として便秘、浮腫等に使われるらしい。

日本名「ゆすらうめ」は、風が吹いてもゆれやすい、あるいは実を採るときに、木をゆすって取ったからといった説がある。中国北部の原産で、日本には江戸時代初めから栽培されている落葉低木である。

近江高島町はもと分部氏二万石の城下町。琵琶湖に面し万葉集に詠まれた明神崎には白髭神社があり、朱の大鳥居が湖中に立っている。神社の裏山には紫式部が立ち寄った際に詠んだとされる歌碑もあって、そこからの琵琶湖の景色が美しい。安曇川町西万木の扇骨作りは三百年の歴史があるとか、安曇川河口の若鮎漁の頃、仕掛けられる大きな上り鮎は壮観であるという。

参考文献「牧野和漢菓草大図鑑」北隆

著者略歴神戸薬科大学卒 薬剤師

ユスラウメ [サクラ属] (ばら科)

*Prunus tomentosa* Thunb.

(梅桜・山桜桃)



薬用部分: 果実、種子



嬰兒の頬さながらにゆすらうめ

\*山口 博通

(\*ぐろっけ)

ゆすらうめことばやさしきひととめて

\*北島 明子

一人居の時の長さよゆすらうめ

細見 綾子

ゆすらうめ実のまだあをきなげきかな

木下 夕爾

つづきたる雨の間に熟れゆすらうめ

五十嵐 播水

山桜桃熟れ老農夙に畦をぬる

飯田 蛇笏

田舎子の小さき口やゆすらうめ

中村 草田男

ゆすら咲く日差しに朝の刻惜しむ

桂 樟蹊子

後れじとゆすらの梅も花ごろも

石塚 友二

万両にゆすらの花の白き散る

正岡 子規

# 鈴の奏

品川鈴子選

クリスマスお願ひ日々に変わる児ら 大阪 吉田 和子

賛美歌を手話で歌ひぬ降誕祭  
読める札前に並べて初かるた  
赤子抱く手に鞍のほてりたる  
初釜や出迎えに立つ寺の門 兵庫 田中 佳子

みかん着く島の暮しの文もあり  
開門を待つ動めきや初恵比寿  
止め炭を忘れる程の雪景色  
遠景の淡路家島初凪げり 兵庫 高木 篤子

調教の馬のたてがみ初御空  
吟行の予定がふたつ初手帳  
筆塚の大きな硯山眠る  
体調を問ふて問はれる初電話 埼玉 松木 清川

松蒼き舞台背にして初稽古  
鴛鴦は顔見合せてまた潜る  
妻と姉越後訛の初電話  
去年今年義母は時空の埒外に 兵庫 内山よしこ

恍惚となりても女初鏡  
七種粥潰して義母の口に入れ  
臘梅にひかれ弱脚步きだす  
日向ぼこ窓を背にして俳誌読む 兵庫 長谷川としゑ  
幼子が母の手を借り餅を搗く  
雪達磨ひと日過ぐれば片目なる

元旦のテレビ体操フルートで  
弘法の梵字投げ筆紅葉川 大阪 井上あき子  
柘榴割る右と左を思案して  
和書洋書井桁に積んで秋深む

父生れし御饌津の島は冬うらら  
民宿の椀の重さよ齋粥 兵庫 中村 碧泉  
脇立は怒りの美なり寒御堂  
拾ひたる恋といふべし歌がるた

萬葉の変体仮名を筆はじめ  
こま犬のあうんの口に冬の草 兵庫 野沢 光代  
輪になつて大声発す初稽古

秀 鈴 記

巻頭 三句 品川 鈴子 評  
四句〜十五句 谷 泰子 〃

\*選句は全て 品川鈴子

クリスマスお願ひ日々に変はる児ら 吉田 和子

幼い頃は願ひ事も、次から次へと思い浮かび、際限もない。サンタクロースに頼んでおけば、必ず叶えられるクリスマスまで、真剣に考えては、迷うばかりの毎日。願望の多寡は未来の持ち時間に比例するのもかもしれない。この微笑ましい児達の健やかな幸先を願いたい。

止め炭を忘れる程の雪景色 田中 佳子

ろうそくの灯のゆらめきが幻想的な夜咄よばなしの茶事。作法通りに進み、名残りを惜しむ炭点前となる頃、ふと庭へ目をやると知らぬ間に雪が降り積もっていた。その美しさに放心し、亭主も客もしばし点前を忘れ、雪景色を愛づる静寂のひとときを楽しんだ。

遠景の淡路家島初凧げり 高木 篤子

家島は瀬戸内海の東部、播磨灘にあり、坊勢島・西島・男鹿島と共に家島諸島をなす主島。兵庫県に属して石材を産する。初凧には淡路島が左に、家島が右に見渡せる。新鮮な魚介類にも恵まれて釣り人をいざなうところ。同じ県内だが淡路ほど知られないまま、古代からおっとり暮らす島のたたずまい。

妻と姉越後訛の初電話 松木 清川

作者はご夫妻共に新潟県のご出身と想像いたします。お姉様からのお電話に、少し改まって新年のご挨拶をされた奥様。でもお互いに体調を尋ね合う頃にはいつもの越後訛に切り替って楽しい会話が続いたことでしょうか。作者も傍で楽しんで聴いておられたのではないのでしょうか。

去年今年義母は時空の埒外に 内山よしこ

新年を迎えてもお義母様の症状は相変わらず、まるで時

空を越えた世界で生きておられる様です。只それだけしか言っておられないのに、老老介護の厳しい現実が十分伝わってきます。介護なさる作者にもお体御大切にと願わずには居られません。

雪達磨ひと日過ぐれば片目なる

長谷川としゑ

地球温暖化が進んで最近では雪が積もることは殆ど無くなりました。それでも偶には少しだけ積もることもあり、子供達は大喜びで雪だるまを作ったのでしよう。帽子を被せたり、炭で目鼻をつけたり…。ところが翌日、陽が当たるとすぐに融け始めて、片方の目は早々と落ちてしまったのです。子供達もがっかりしたことでしょう。

父生れし御饌津の島は冬うらら

井上あき子

「御饌」は神又は天皇に差し上げる食糧。津は港。更に詳しく知りたくて、いくつかの辞書や地図で調べるうちに、「御食みけつ国野島の海人の舟にあるらし／万葉集（天皇の召し上がり物を献上する野島の海人の舟であるに違いない）」というのが見つかりました。「野島」は歌枕「野島が崎」

で兵庫県淡路島北部、松帆崎辺りの海岸と判りました。万葉集の時代、新鮮な海産物を献上できた気候温暖な島。淡路島が作者のお父様の故郷なのではないでしょうか。

脇立は怒りの美なり寒御堂

中村 碧泉

脇立は脇侍とも言われ、本尊の両脇または周囲に侍して衆生教化を助けるもので、阿弥陀如来には観音・勢至菩薩。釈迦如来には文殊・普賢菩薩。薬師如来には日光・月光菩薩。という風に組合せが決まっています。でも菩薩像は「怒りの美」ではない。ならば金剛力士（仁王）像かとも考えていた時、何年か前に吟行した新薬師寺を思い出しました。資料を探し出してみると、ご本尊の薬師如来像の周囲に外向きに配された十二神祇像がありました。私の推理は間違っているかも知れませんが、季語も含めて私のイメージにぴったりと合いました。（以下略）